

## 『社会言語科学』特集論文募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、以下の要領で特集「ことばとパワー ―コミュニケーションの非対称性を可視化・意識化する―」の論文を募集いたします。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。

なお、特集では最終投稿期限が設定されていますのでご注意ください。投稿論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入ります。したがって、より早く投稿された論文ほど、査読が早く済み、論文を修正する機会が多くなります。最終投稿期限は特集論文の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので、早く投稿できる方は早めに投稿されることをお勧めします。刊行時期までに採択とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

特集論文の最終投稿期限：2022年9月30日（金）

掲載号の発行：2023年9月（第26巻第1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：電子投稿システムを通じて投稿してください

（HPの「学会誌」ページ参照）

---

### ことばとパワー

#### ―コミュニケーションの非対称性を可視化・意識化する―

担当エディター：

布尾 勝一郎（立命館アジア太平洋大学）

河崎 みゆき（國學院大學）

名嶋 義直（琉球大学）

岡本 能里子（東京国際大学）

言語使用には、必ず何らかのパワー（権力）の問題が付きまとう。換言すれば、コミュニケーションには常に非対称性が存在している。

『社会言語科学』では、これまで、パワー（権力）・ことばの力関係の問題を正面からテーマとして扱ってこなかった。差別や抑圧、搾取につながるなど社会的な影響が大きく、重要な課題であるにもかかわらず、である。そこで、本特集では、「ことばとパワー」をテーマとして取り上げることにしたい。

パワーハラスメントやアカデミックハラスメント、SNS上の中傷、ヘイトスピーチ、政治家の政敵への批判など、ことばを用いた暴力は枚挙にいとまがない。これらは言わば、目に見える形でのパワーの行使である。他方、目に見えない形で非対称性が固定化され・再生産されることも多い。たとえば政治家が「〇〇の声に寄り添って進めていく（〇〇には、例えば「沖縄」のような地名など）」という発言を行う

場合などである。表面では歩み寄りを演じつつ実際にはその声を排除し、政府の思い通りに進めるというパワーの行使が行われる。他にもフェイクニュースへなびいて行く構造など、明らかにすべき問題は多岐にわたる。

「ことば」の力関係は言語間の格差で見れば、方言と標準語の格差、母語、学習言語、外国語、継承語、少数言語の位置づけ、世界における英語帝国主義などにも表れている。

また、言語使用の観点では、代表的なテーマとして、政治家の国会答弁、大統領や首相のスピーチに埋め込まれた差別や排除、ことばの言い換え（「侵略」→「進出」）などが、問題として取り上げられてきた。また、教育現場で見られる教師と学習者の力関係や、医療場面や裁判などにおける制度的談話、親しい間柄におけるコードスイッチングに現れる非対称性、なども研究対象となろう。

さらに、ことばの「性差」といった観点も非対称性（力関係）からとらえることができる。例えば今議論されている夫婦別姓問題や、個人や家族、上下関係、役割関係、性別等を表す呼称の問題や、LGBTQ（性的マイノリティ）の言語の問題がある。そして、性的マイノリティのカミングアウトを難しくする多数者のパワーがいまだ社会には存在している。こうした非対称性に対して私たち自身や社会は何に気づき、改善していくべきだろうか。

本特集では、以上のような対象に限ることなく、パワーの行使の裏に隠されたもの、非対称性の構造を明らかにする論考を期待している。

テーマから連想される方法論としてまず頭に思い浮かぶのが批判的談話研究（Critical Discourse Studies、略してCDS）ではないだろうか。確かに、CDSは、パワーを持つ側の談話を分析することでパワーの行使・強化・再生産などを可視化し、市民のエンパワメント、リテラシーの向上に寄与することを目的として研究に取り組む。しかし、それはパワーによる非対称性に潜む社会問題の解決への道筋を探ろうとする多様な「アプローチ」であり、そこで共有されるのは「研究や研究者の批判的姿勢」である。一つの確立された理論でも談話研究の方法論の1つでもない。したがって本特集ではさまざまな方法論による研究が可能である。

本特集号の研究の射程は、方言、語彙、文法、音声、対照言語、言語行動・非言語行動、歴史言語学、ことばとアイデンティティなど、多岐にわたると想定されるが、従来の研究領域や研究方法に縛られることなく、学際的な視点、複合領域、新しい研究手法、折衷的な取り組みを歓迎したい。「これまで意識してこなかったが、自分の研究も、ことばとパワーに関連するかもしれない」と思っていただけであれば幸いである。

本特集号での議論を通して言語とパワーをめぐる多様な議論の場を創発し、自分自身の日々の研究やコミュニケーション行動が、無意識のうちにパワー（権力）を行使し、それがだれかを抑圧することにつながっていないか、自覚的になるきっかけを提供したい。そして、社会に潜む格差や非対称性を解消する道筋を考え、それがだれかを力づける「エンパワメント」につながる…。そんな特集になることを、エディター一同、心から望んでいる。